

こころの研修

平成26年度 伊都地方人権尊重連絡協議会

「こころの声をみんなでも受け止めよう」 不登校・ひきこもり経験者からの心のメッセージ

毎年ひらかれている「こころの研修」を7月23日、かつらぎ町総合文化会館で不登校・ひきこもりの経験者本人からの話を聞きながら、理解と支援へのポイントを学習する内容であった。

パネリストに野中康寛・ひきこもり者社会参加支援センター長、コーディネーターに藤本綾子・社会福祉法人一麦会、当事者の草下敦司さん(35歳)と棚橋洋次郎さん(25歳)の4人でパネルディスカッション形式でおこなわれた。草下さんは中学生の時から20年間自宅にひきこも

り、10歳ごろから20歳前半までは読書、その後はパソコンに没頭した。母親は基本的にせかすことはなく見守ってくれた。2年ほど前から、紀の川病院のひきこもり外来に通院している。棚橋さんは、他県から和歌山の大学に入学したが、失敗や嫌なことが度重なり外出できなくなったことを

きっかけにひきこもり、18歳から4年間、ゲーム・漫画・テレビなどで過ごした。2人に共通することは、外に出られないことがつらく、周囲から置きざりにされ世間とずれていくことへの不安やあせり、うつ状態にあり常に自殺を考えていた。

支援するポイントは、解決法を見出すのではなく、理解すること。信頼関係をつくり、家族や社会への安心感の再構築をおこなう。また、心の痛みは相当根深く、その原因は複合的なので、追究し掘り下げず、人間本来の欲求を満たすようになること。これは、安心して食べ、寝むり、所属する、認められる、成長したいと思う、誰かの役に立ちたいと思うことである。

「戦争許すな！」 ランチタイムデモ

一環として昨年8月、創h ajime cafe をオープンし、就労の場を創り、仲間づくりや体験し壁にぶち当たりながら少しずつ乗り越え成長している。世間ではひきこもり者を特別視しがちだが、支援センターでの活動や就労体験などで培った社会性を個々のペースで前進している社会の理解が必要である。としめくくった。

(一)

11月7日に本年度の対和歌山県交渉をひらく。交渉は、地域や生活の場でさまざまな実態や課題の解決をつうじて部落差別をなくそうとするもので、運動の基本となる。地域の要求を集約し、大衆自身の行動で実現させることが、行政闘争(交渉)だ。このことから、7月から9月にかけて各市町村交渉を展開してきた。実態は差別の反映であり、県内の各部落で非常に厳しい状況を余儀なくされている。にもかかわらず、要求がない、部落大衆の「声」

主張

部落大衆の「声」を 対県交渉に 集約しよう!

がないということは、重大な問題であり、早々に日常の支部活動の課題として組織的にとりくみが必要だ。

- ①「和歌山県人権課題現況調査」から5年が経過し、部落差別の実態があらわになったことをふまえ、「人権・南海地震」への防災計画の見直し、⑥「福祉と人権のまちづくり」の強化・推進、⑦「同和教育基本方針」の堅持と学力と進路の保障を中心に交渉にのぞむ。

(二) 交渉は、支部からだされる。交渉は、さまざまな要求を基礎に、各部落の基本要求を柱として、要求の実現にむけとりくむ。基本要求は、

- 「権行政」を確立・推進されること、②また、各市町村への指導と支援、③差別事件が継続していることをふまえた差別事件へのとりくみと教育啓発、④身元調査



当事者が自身の体験を語った

文化の窓

「歴史に灯を」

言ってきたこと、やってきたこと、できなかったこと
ISBN978-4-907244-08-8 / 阿叻社 2014年3月31日発行
これまで、和歌山市史編纂や和歌山の部落史、高野山文書編纂などにかかわってこられた筆者が30年間務めた大学を退職し、これまで「言ってきたこと、やってきたこと、できなかったこと」を記した一冊。現在は、旧真田山陸軍基地の研究と大阪国際平和センター(ピースおおさか)の活動に協力されている。ますますのご活躍をお祈りして。
◆お問い合わせは県連・教宣部まで
TEL 073-473-2301



横断幕とともに

「戦争許すな!」とシユプレヒコールしてデモ行進した。